

## 大手銀行株の堅調な動きが、日本株市場全体のセンチメントを押し上げる

2010年1月15日(金)

第一生命経済研究所 経済調査部  
副主任エコノミスト 人見 小奈恵  
TEL 03-5221-4523

### 米小売売上高は予想下振れも、米半導体大手の好業績期待を背景に底堅い展開

米国株式相場は、米小売売上高は予想を下回ったものの、引け後発表の米半導体大手の好業績期待を背景に小動きながらも底堅く推移し、NYダウ、S&P500ともに年初来高値を更新しました。軟調な商品市況を背景に素材関連株は軟調でしたが、アナリストのレーティング引き上げが好感されたハイテクやヘルスケア関連のほか、金融株も堅調で相場を押し上げました。独ソフトウェア大手が発表した10-12月期の決算速報で、売上が市場予想を上回ったことも、ハイテク関連株にとって好材料でした。

12月の米小売売上高は前月比▲0.3%と、予想(+0.5%)に反して3ヶ月ぶりに低下しました。内訳をみると、電気製品が▲2.6%と大きく落ち込んだほか、自動車・同部品は3ヶ月ぶりにマイナスに転じました。また、2009年の通年ベースでは、▲6.2%減と1993年の調査開始以来、最大の下落となりました。11月の数値が+1.8%と速報値(+1.3%)より上方修正されたことから、これを嫌気した動きは限定的でしたが、失業率が10%程度で高止まりする中、米個人消費は依然として脆弱な状況であることが改めて示唆されました。

注目の米半導体大手の09年10-12月期決算は、パソコンの出荷が好調で、市場予想を上回る大幅な増収増益となりました。前年同期比で売上高は+28%、純利益は9倍超でした。粗利益率も64.7%と前年と比べて11.6ポイント改善し、過去最高でした。同時に発表された1-3月期の売上高見通しもアナリスト予想を上回ったことから、同銘柄は時間外取引で大幅高となりました。

### 銀行株高が終日相場を支える

日本株式相場は、銀行株や内需ディフェンシブ、外需関連株が堅調な一方、海運や鉄鋼などの市況関連株中心に軟調で、前日比ほぼ変わらずで始まりました。大手銀行株がそろって堅調に推移していたことから、株式相場全体が底堅く、徐々に上げ幅を広げていきました。ただし、為替市場では円が主要通貨に対して全面高の展開になると上値が抑えられ、前引けにかけて日経平均株価は前日終値を小幅ながら割り込みました。世界経済フォーラムにおける先進国をはじめとした財政悪化に対する警告や、独首相の辞任観測、ギリシャの財政赤字拡大問題等が意識されて、リスク回避的な動きが強まり、為替市場ではユーロ中心に売りが加速して円が買われる展開となりました。しかし、後場に入ると不動産株中心に買われ、円高一服とともに外需関連株も上げ幅を広げる中、株価指数先物にも買いが広がりました。結局、日経平均株価は高値引けとなり、連日で昨年来高値を更新しました。東証一部銘柄のうち値上がりした銘柄は半数に届かず、上昇を牽引したのは一部の主力株に限られましたが、東証一部売買代金は1兆8000億円台まで膨らみ、現物、先物ともに外国人投資家の買いが日本株上昇に寄与しているように感じました。事実、1月第1週の外国人投資家の買い越し額は7,000億円を超え、約5年10ヶ月ぶりの高水準でした。

業績回復期待の強い外需関連株のみならず、出遅れ感のある内需関連株にも買い戻しの動きが見られ、物色対象が広がるなど、日本株市場にとって好条件が徐々に揃いつつあります。ただし、足元でのマクロ経済指標には日米ともに予想を下回るものも目立っており、株式市場はこれらの悪材料を上回る業績改善への期待感で押し上げられているように思います。上昇基調は今後も続くと考えていますが、過熱感も漂いはじめており、上昇ピッチの修正あるいは企業業績の内容次第では一時的に調整するリスクもあるように思います。

以上